

栄養士養成課程の学生の現状と課題

坂本 裕子・横田 直子
今中 美栄・田中 恵子

本学でも栄養士資格取得者の栄養士職への就職率が高くなり、専門職としての質の担保が求められていることから、栄養士課程の学生対象にアンケート調査を行い、現状把握を行った。授業に対する理解や熱意は入学前の食物栄養に関する知識や情報、入学後の自習時間の有無と関連が見られた。また、校外実習に対する満足度は高く栄養士のイメージが向上した。入学前を含む教育支援、体験学習等を活用し、学生に自主的に学ぶ機会を持たせることの必要性が示唆された。

キーワード：栄養士、栄養士校外実習、自習時間、入学前知識、授業理解・熱意

1. はじめに

栄養バランスや食習慣の乱れが指摘され、それらがもたらす生活習慣病の増加が懸念されている。また、先進国の中でも食料自給率が低く、伝統的食文化の衰退が心配されるなど、日本の食をめぐる諸課題は山積している¹⁾。一方で2010年度の時点で栄養士免許を持つ者は全国に約95万人と報告され、毎年2万人近くの者が栄養士免許を手にしている²⁾。人々の食への健康志向や安全志向が高まる中、情報を取捨選択し、望ましい食生活を実践するためにも栄養士の活躍が期待されている。

2002年に管理栄養士・栄養士の新たな養成課程が施行された。管理栄養士や栄養士を取り巻く社会環境は急速に変化し、より高度な知識や技術の養成が必要とされている^{3,4)}。「特定検診・特定保健指導」など次々に新しい施策が実施される中、栄養管理は医学・医療の一端を担うものと評価され、社会のニーズとして、専門分野の多様化・高度化への対応が求められている^{3,4)}。

当短期大学では毎年100名前後の栄養士を養成しているが、過去10年間の栄養士業務への就職率を見てみると、2002年度卒業生で16.4%であったものが、2006年度は40%前後にまで増加し、2009年度以降は50%を超えるようになった。全国的にも栄養士養成課程をもつ短期大学において、新規卒業生数に対する栄養士業務就職者数の比率は2005年度から40%を超えるようになり、2010年には49.2%と約半数になっている⁵⁾。

2011年の短期大学卒業生職業別就職者数の比率においても、「専門的・技術的職業従事者」が57.8%で最多となっており、10年前と比較して大幅に増加している⁶⁾。学生の就職先が一般職から専門職へとシフトしており、栄養士も例外ではないことを示している。

短期大学における栄養士の就職率が近年高くなり、専門職としての質の担保が問題となる今、栄養士養成課程の学生の現状把握を行うことには意義があると考えられる。特に栄養士校外実習の前後で見られる意識の変化に注目し、今後の質の高い栄養士養成に向けて検討することを目的

に調査を行った。

2. 方法

京都府にある短期大学食物栄養専攻（現・食物栄養学科）のⅡ回生 113 人を対象に、栄養士校外実習の前後にあたる 2011 年 7 月及び 10 月にアンケート調査を行った（回収率：7 月 92.9%、10 月 87.6%）。尚、調査に際し、対象者には調査の主旨、結果の活用範囲等を周知し協力を依頼した。

調査内容は、7 月実施分では入学志望理由、取得希望資格、食物栄養の授業についての理解度や取り組みの意欲などの自己評価、入学前の食物栄養に関する知識や情報の有無、自習時間の有無、就職状況等に関する 45 項目、10 月実施分では栄養士校外実習に対する満足度や意識の変化、就職状況、学外実習参加意欲等に関する 18 項目である。

食物栄養の科目に対する理解度と取り組みの意欲については、授業を大きく専門講義科目、実験科目、実習科目の 3 つに分け自己評価してもらった。評価は低い 1 から高い 5 のスケールの中から 1 つを選ばせ、1 から 3 を「低い」、4、5 を「高い」の 2 群に分けた。講義、実験、実習科目の理解度と取り組みの意欲別にそれぞれ「講義理解（n=97）」「講義熱意（n=95）」「実験理解（n=97）」「実験熱意（n=96）」「実習理解（n=97）」「実習熱意（n=96）」として集計した。

同様に、授業についていけないという危機感の自己評価についても「有り」「無し」の 2 群に分けた（n=97）。

また、「入学前の食物栄養への知識・情報（n=101）」「自習時間（n=105）」について、それぞれ回答者を「有り」「無し」の 2 群に分け、「講義理解（n=97）」「講義熱意（n=95）」「実験理解

（n=97）」「実験熱意（n=96）」「実習理解（n=97）」「実習熱意（n=96）」との関連性をみた。

これら項目について比率の検定、カイ二乗検定を行い、危険率 5% 未満を有意とした（SPSS ver.19）。

3. 結果・考察

（1）食物栄養専攻学生の資格取得や授業への取り組みの現状

1) 短期大学、食物栄養専攻への志望理由

栄養士校外実習前のアンケートから、短期大学への入学理由は、「2 年間で免許・資格が取得できる魅力」と回答した者が 55.8% で最も多く、次いで「経済的理由」が 24.0% であった。

また、当短期大学を選んだ理由として「免許・資格の内容」を挙げた者が 46.6% で最も多く、学生が免許や資格を重視していることが窺える結果となった（表 1）。日本私立短期大学協会が実施した学生生活に関する調査でも、短期大学に進学した理由として「取りたい資格が取得できる」が 48.1% で最も多かったと報告されている⁷⁾。

また、入学前の食物栄養専攻志望理由を複数選択してもらったところ、栄養士免許の取得が 68.3% で最も多かったが、栄養教諭免許やフードスペシャリスト資格の取得に関してはそれぞれ 1.9% と 7.7% で、どちらも 10% に満たず、入学前の関心は低い状況であった（図 1）。一方、資格以外に「食と調理に興味・関心があった」が 46.2% で、栄養士免許の取得に次いで高い結果となった。

免許希望の推移を見ると、図 1 に示すように入学直後に栄養士免許の取得を希望した者は 98.1%、栄養教諭免許は 11.4%、フードスペシャリスト資格は 62.9% であり、入学前と比較する

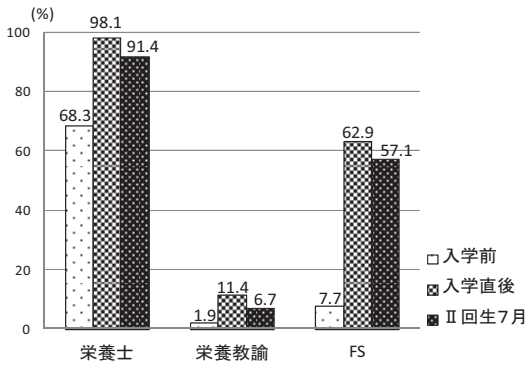


図 1. 免許取得希望の変化

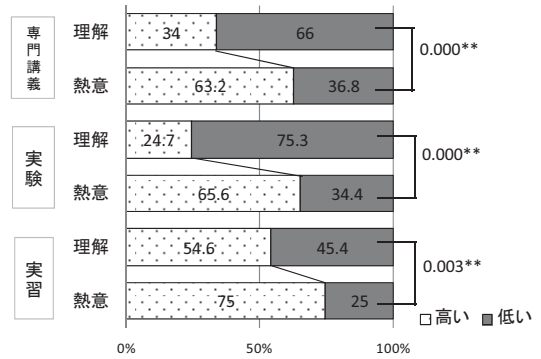


図 2. 授業に対する理解と熱意

とそれぞれに大幅な増加が見られた。入学後、オリエンテーションなどで免許や資格の情報を得たことが大幅な増加の背景にあると思われる。しかし、Ⅱ回生になると履修継続が出来ない者が現れ、いずれの資格も取得希望者が減少する。

2) 授業に対する理解・熱意

食物栄養の専門講義、実験、実習についての理解と熱意についての自己評価は、専門講義、実験、実習のいずれにおいても、理解と比較して熱意の方が「高い」と回答した者の割合が多く、両群の比率に有意差が見られた（図2）。

理解の中でも、「実験理解」の高い者が24.7%で最も低かった。一方、「実習理解」の高い者は5割を超え、「実習熱意」の高い者は75%とさらに高かった。専門講義や実験と比較して、実習は調理など身近に感じられる内容が多く、理解や熱意の高さに結びつきやすいと考えられる。

また、「講義理解」と「講義熱意」、「実験理解」と「実験熱意」、「実習理解」と「実習熱意」の高低の比率には有意差が見られたことから、熱意に対して理解が伴っていないという現状が窺えた。この熱意や理解度は学生の自己評価を基にしており、理解度の低さは学生の自信のなさを表しているとも考えられる。

3) 入学前の食物栄養に関する知識・情報の有無

「入学前に食物栄養に関する知識や情報を持っていたか」との質問には47.5%が「あった」と回答した（表1）。「あった」と回答した者に情報源を問うたところ（複数回答）、「オープンキャンパス」と答えた者が50.0%で最も多く、「高校・塾」27.1%、「自分で調べた」31.3%、「家族・友人・知人」は20.8%であった。

自ら足を運ぶオープンキャンパスや自分で調べたという回答から、入学前から知識や情報を持っていた者の積極性が窺える。

4) 自習時間の有無

「自習時間を持っているか」との質問には、39.0%の者が「持っている」、61.0%の者が「持っていない」と回答した（表1）。

「持っている」と回答した者に頻度を尋ねたところ、「毎日」と回答した者はわずか3.0%しかおらず、「週5～6回」9.1%、「週3～4回」27.3%、「週1～2回」と回答した者が60.6%で最も多かった。頻度が多くなるにつれて少数となった。「持っている」と回答した者でさえ、6割が週に1～2回の頻度でしか取り組んでいないことが分かった。

また、「持っている」と回答した者に自習内容を問うたところ（複数回答）、「予習・復習」を

表 1. 学生の現状と栄養士校外実習に関する集計結果

項目		(%)	
実習前アンケート	短大への入学理由	「短大」への興味・憧れ	1.0
		2年間で免許・資格が習得できる魅力	55.8
		学力的に見合う	9.6
		経済的理由	24.0
		なんとなく	3.8
		先生に勧められた	3.8
		その他	1.9
	K短大への入学理由	K短大への興味・憧れ	5.8
		免許・資格内容	46.6
		学力的に見合う	11.7
		なんとなく	3.9
		先生に勧められた	12.6
		身内などが通っている(いた)	3.9
		立地条件	9.7
	その他	5.8	
	食物栄養専攻に関する入学前の知識・情報	有	47.5
		無	52.4
	自習時間・機会	有	39.0
		無	61.0
	授業への危機感	有(感じる)	58.8
無(感じない)		41.2	
実習後アンケート	実習先の施設	事業所	36.0
		高齢者施設	36.0
		病院	18.6
		小学校	9.3
	校外実習に行ってよかったと思うか	思う	96.5
		思わない	3.5
	他の学外実習への参加意欲	有	53.6
		無	46.4
計		100.0	

挙げた者は 39.0% で 4 割にとどまった。「料理」を挙げた者が 58.5% で最も多かった。食物栄養として「料理」は欠かせない要素であるが、学生として授業内容の「予習・復習」を行い、知識の定着を図る必要があろう。「予習・復習」に取り組ませるような授業展開が必要であると考え。

一方、自習時間を「持っていない」と回答した者にその理由を問うたところ、「アルバイト・部活等で忙しい」が 48.4% で最も多かった。「なんとなくかなと思う」という楽観的な意見の者が 21.9%、「何をしたいのか分からない」と消極

的ともいえる意見の者が 23.4% いた。

(2) 栄養士校外実習の経験

Ⅱ 回生の 9 月実施の栄養士校外実習の実習先は、事業所、高齢者施設がともに 36.0%、病院 18.6%、小学校 9.3% であった。

1) 栄養士校外実習に対する満足度と実習を終えて感じた栄養士に必要な能力

栄養士校外実習に行った者のうち 96.5% が、「行って良かったと思う」と回答した。その理由として、「良い経験になった」という声が多く挙げられ、他にも「現場の声が参考になった」「自

分に足りないことが分かった」という意見もあった。一方で、「行って良かったと思わない」と回答した3人(3.5%)の理由に、「1週間では現場を十分に理解できず、意味がないと思った」が挙げられた。

実習を終えて、実習前に身につけておけば良かったと感じた能力は、「調理技術」「献立作成能力」がともに48.8%で最も多く、現場へ出たことで栄養士としての自分の未熟さを学生が感じ取った結果であると思われる。次いで、「コミュニケーション能力」が30.2%で多い結果となった(図3)。宇和川ら⁸⁾も実習で必要なことに、「挨拶」や「人間関係」を挙げる学生が実習後に増加したことを報告している。

日本私立短期大学協会の報告⁷⁾によると、社会人になるための基本的生活習慣として「言葉遣い」を挙げる学生が最も多く、「目上の人に対する接し方」を挙げる者も3割を超えるという。また、日本経団連の新卒採用(2010年3月卒業者)に関するアンケート調査⁹⁾では、採用選考時に重視する要素の第1位は7年連続で「コミュニケーション能力」であり、傾向として「主体性」「専門性」「一般常識」の注目度が高まっているという結果が得られている。

「コミュニケーション能力」は社会へ出るにあ

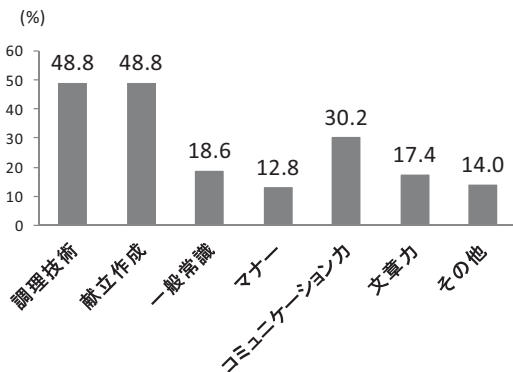


図3. 実習前習得しておくべき能力（複数回答）

たって必要とされている能力であり、学外での実習により、学生がそれを感じ取ったのであろう。校外実習は栄養士としての就職意欲の有無に関わらず、学生にとって有意義な体験となっている。

2) 栄養士校外実習前後の意識の変化

栄養士校外実習前に、栄養士に「良い」イメージを持っていた者は47.7%であったのに対し、実習後は72.1%に増加していた。「どちらでもない」と回答した者が、実習の前後で41.9%から18.6%に減少しており、「良くない」と回答した者は10.5%から9.3%とわずかに減少していた(図4)。

また、「栄養士として就職が決まっている」もしくは「栄養士としての就職を希望する」者が実習前35.2%であったのが、実習後には57.6%に増加していた。この増加には、校外実習で栄養士の仕事を実際に体験して、学生の栄養士に対するイメージが良くなったことも大きく影響

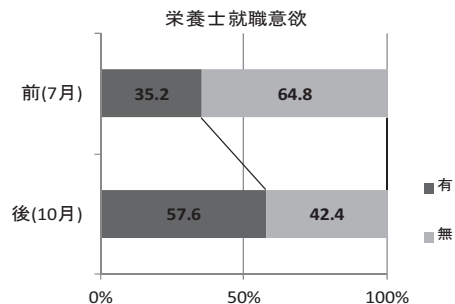
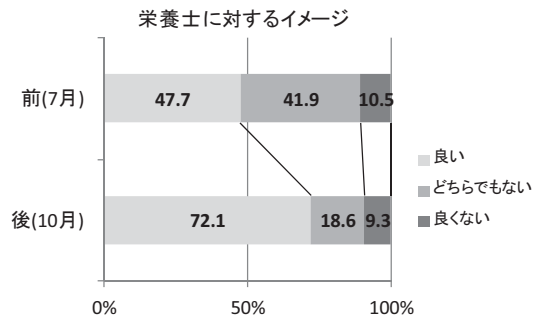


図4. 実習前後に見られる意識の変化

しているのではないだろうか。

栄養士のイメージが「良い」理由として、「人のためになる」「やりがいがある」と回答する者が実習の前後を問わず多く、実習後は「やりがいがある」と答える者がさらに増加した。一方、「明るい」「長く続けられる」と回答する者も実習後増加するが、ともに2割に満たなかった。しかし、「明るい」イメージは2.4%から19.4%と最も大きく増加していた（図5）。

「人のためになる」「やりがいがある」と答える者が多い一方で、「長く続けられる」と答える者が少ない背景には、栄養士の仕事が食事を通してヒトの健康に貢献する一方で、立ち仕事や力仕事が多い、勤務形態の問題もあるのではないだろうか。また、就職後の離職率が高い現状もあり、長く続けられるような職に変えていくことが求められる。

3) 学外実習への参加意欲

「栄養士校外実習以外に、学外実習が行われるならば参加したいか」との質問に、「参加したい」と回答した者は53.6%であった。理由としては、「いろいろな現場を見てみたい」「知識が深まると思うから」といった声が多かった。希望する実習内容としては「他の施設での実習」41.7%、「農業体験」33.3%、「工場見学」13.9%、「ボランティア」2.8%、「その他」8.3%であった。希望する実習内容には「食」に関するものが多く挙

げられ、栄養士としての知識や経験を増やしたいという姿勢が見受けられた。

一方、学外実習に「参加したくない」と回答した者の理由に「学内の実験、実習、栄養士校外実習だけで十分」「アルバイト等で忙しい」「栄養士になるつもりがないので不要」といった声が挙げられた。学外実習や体験授業はこれまで修得してきた専門知識を体得するだけでなく、年齢、性別等異なる集団と関わることにより、「コミュニケーション能力」など社会で必要とされている能力の養成にも繋がる。栄養士への就職意欲の有無に関わらず、社会人力の養成のためにも積極的な支援の必要性があろう。

(3) 栄養士養成に向けての今後の課題

1) 授業に対する理解度・熱意と入学前知識や自習時間との関連

学生の授業に対する熱意に対し理解が伴っていないという現状を踏まえ、学生の理解を深めるための必要な要素は何だろうか。入学前の姿勢が、入学後の授業に対する理解や熱意に影響を与えるのではないかと考え、入学前の食物栄養に関する知識・情報の有無と、「講義理解」「講義熱意」「実験理解」「実験熱意」「実習理解」「実習熱意」との関連をみたところ、すべての項目で5%以上の有意水準で差が見られた（表2）。

次に、入学後、理解や熱意に直接影響を与えるものとして自習時間の有無に着目した。表2からも分かるように、自習時間の有無と、「講義理解」「講義熱意」「実験理解」「実習理解」の間で有意差が見られた。また、有意差は見られなかったものの「実験熱意」においても、自習時間を持つ者の方に熱意があるという傾向が見られ、自習時間が学生の授業に対する理解や熱意の向上に効果があり、授業時間外に自ら学ぶ時間や機会を持つことの重要性が示唆された。

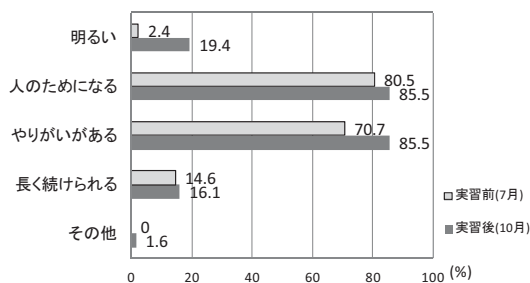


図5. 栄養士のイメージが「良い」理由（複数回答）

表 2. 授業理解・熱意と入学前知識や自習時間との関連

項目			入学前の食物栄養への知識・情報			χ^2 検定	自習時間			χ^2 検定
			有	無	計		有	無	計	
専門講義 理解	有	人	22	10	32	0.004**	19	14	33	0.005**
		%	48.9	20.8	34.4		51.4	23.3	34.0	
	無	人	23	38	61		18	46	64	
		%	51.1	79.2	65.6		48.6	76.7	66.0	
	計	人	45	48	93	0.006**	37	60	97	0.002**
		%	100.0	100.0	100.0		100.0	100.0	100.0	
専門講義 熱意	有	人	35	23	58	0.011*	29	31	60	0.000**
		%	77.8	50.0	63.7		82.9	51.7	63.2	
	無	人	10	23	33		6	29	35	
		%	22.2	50.0	36.3		17.1	48.3	36.8	
	計	人	45	46	91	0.003**	35	60	95	0.052
		%	100.0	100.0	100.0		100.0	100.0	100.0	
実験 理解	有	人	17	7	24	0.043*	17	7	24	0.015*
		%	37.8	14.6	25.8		45.9	11.7	24.7	
	無	人	28	41	69		20	53	73	
		%	62.2	85.4	74.2		54.1	88.3	75.3	
	計	人	45	48	93	0.027*	37	60	97	0.330
		%	100.0	100.0	100.0		100.0	100.0	100.0	
実験 熱意	有	人	37	25	62	0.027*	28	35	63	0.330
		%	82.2	53.2	67.4		77.8	58.3	65.6	
	無	人	8	22	30		8	25	33	
		%	17.8	46.8	32.6		22.2	41.7	34.4	
	計	人	45	47	92	0.043*	36	60	96	0.015*
		%	100.0	100.0	100.0		100.0	100.0	100.0	
実習 理解	有	人	30	22	52	0.043*	26	27	53	0.015*
		%	66.7	45.8	55.9		70.3	45.0	54.6	
	無	人	15	26	41		11	33	44	
		%	33.3	54.2	44.1		29.7	55.0	45.4	
	計	人	45	48	93	0.027*	37	60	97	0.330
		%	100.0	100.0	100.0		100.0	100.0	100.0	
実習 熱意	有	人	38	32	70	0.027*	29	43	72	0.330
		%	86.4	66.7	76.1		80.6	71.7	75.0	
	無	人	6	16	22		7	17	24	
		%	13.6	33.3	23.9		19.4	28.3	25.0	
	計	人	44	48	92		36	60	96	
		%	100.0	100.0	100.0		100.0	100.0	100.0	

* p<0.05 **p<0.01

授業に対する危機感の有無と自習時間の関連には有意差は見られず、危機感を感じている者の方が自習時間を持っているという傾向は確認できなかった。

自習時間を持たない主な理由として「アルバイト・部活等で忙しい」「何をしたいのか分からない」「なんとなくかなと思う」が挙げられたが、学生の授業に対する熱意や理解を高めるためには、自習時間を持つ学生を増やす支援が必要である。また、すでに自習時間を持つ者でもその内容に「予習・復習」と回答した者は4割にと

どまり、頻度は「週に1～2回」と回答する者が最も多く、まだまだ貧弱な状況であった。これらを増やす支援も同様に必要であろう。

貴重な学生時代に、基礎的な学力や専門的な知識の蓄積を行うことができるよう、授業の中だけでなく能動的に学ぶ姿勢を身につけることが大切である。学外実習や体験授業は学生がこれまでに蓄積してきた知識を発揮する場であり、それゆえ自らの知識や経験の不足にも気付く、能動的に学ぶきっかけになるのではないかと考える。学生の学ぶ意欲に応え、理解を深め

るために、学習支援の充実も図る必要がある。

2) 学外実習参加意欲と栄養士就職意欲との関連

学外実習参加意欲のある者に希望する学外実習を問うたところ、「他の施設での実習」や「農業体験」といった声が多かったが、反対に学外実習参加意欲のない者の理由に「栄養士になるつもりがないので不要」という回答が見られた。「学外実習参加意欲」と「栄養士就職意欲」との関連性を見ると、両者には有意差が見られ($p<0.01$)、栄養士就職意欲のあるものほど、学外実習の参加意欲が高かった。「栄養士として就職が決まっている」もしくは「就職したい」者は具体的に仕事のイメージができており、また、栄養士校外実習で自らの未熟さに気付いた部分も大きく、このような結果に繋がったと考える。

4. まとめ

短期大学への入学理由に、「2年間で免許・資格が取得できる魅力」と回答した者が約半数であったが、入学後、より多くの学生が免許や資格の取得を希望するようになった。

授業の理解と熱意の自己評価において、専門講義科目・実験科目・実習科目の全てで、熱意に対し理解が伴っておらず、特に実験に対する理解が低いという結果であった。今後の課題として実験での理解の向上が求められる。また、現在の授業に対する理解や熱意は、入学前の食物栄養に関する知識・情報や自習時間の有無との間で有意な関連が見られた。授業に対する危機感を感じながらも自習時間を持っていない学生もあり、今後は約4割であった自習時間を持つ者の割合を増やす必要がある。その中でも特に、授業に対する危機感を持ちながらも自習時間を持たない学生への学習支援が必要であると考え

る。栄養士校外実習に対する満足度は高く、学生が自分に足りないものを認識するきっかけや栄養士のイメージの向上に繋がっている。また、半数を超える者が栄養士校外実習以外の学外実習や体験授業を希望していた。

当短期大学で栄養教諭免許を取得した卒業生を対象にした調査¹⁰⁾や報告¹¹⁾、栄養士教育に農業体験を導入した大崎の報告¹²⁾においても体験学習の有用性は示されており、体験学習には学生の「気づき」を促す効果が期待できると考える。今後、学外実習や体験授業を多く取り入れたカリキュラムの展開を検討し、それらが学生の「食物栄養」への興味を高め、自主的に学ぶ動機となり得るのかどうか教育効果をさらに図っていきたい。学外実習や体験授業は近年必要とされている「コミュニケーション力」の養成にも繋がり、栄養士免許取得の有無や栄養士就職意欲の有無に関わらず、すべての学生の資質向上に効果的であると期待される。

今回の調査により、入学前の「食物栄養」に関する知識・情報の提供や、入学後、学生が自主的に学ぶ機会を持つことの必要性が示唆され、栄養士校外実習による学生の意識の変化も確認できた。これらを踏まえて、入学前を含む教育支援や学びに対する自主性の養成が必要であり、学外実習や体験授業を取り入れたカリキュラムの充実を図ることの重要性が示された。今回は単年度の調査結果であることから、今後は継続して調査していく必要があると考える。

謝辞

今回の調査を行うにあたり、協力して頂きました短期大学食物栄養専攻の学生の皆様に心より御礼申し上げます。

参考文献

- 1) 農林水産省、我が国の食生活の現状と食育の推進について (2012 年 2 月版)
http://www.maff.go.jp/j/syokuiku/pdf/genjou_kadai_201202.pdf, 2012/2
- 2) 厚生労働省、栄養・食育対策の推進
<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/eiyou.html>, 2012/2
- 3) 町田和恵、大見奈緒子、花木秀子、油田幸子、東博文：教育介入による学生の専門職における管理栄養士・栄養士の職業観への影響、鹿児島県立短期大学紀要 自然科学篇 61, pp.45-59、(2010)
- 4) 社団法人日本栄養士会
<http://www.dietitian.or.jp/>, 2012/2
- 5) 社団法人全国栄養士養成施設協会：平成 22 年度栄養士課程及び管理栄養士課程卒業生の就職実態調査の結果、全栄協月報、第 614 号、pp.9-75、(2011)
- 6) 文部科学省、学校基本調査 平成 23 年度 (速報) 結果の概要
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/toukei/chousa01/kihon/kekka/k_detail/1315581.htm, 2012/3
- 7) 日本私立短期大学協会学生生活委員会：学校生活に関する調査報告書 vol2、(2011)
- 8) 宇和川小百合、色川木綿子：栄養士校外実習にみる意識の変化－栄養学専攻の場合－、東京家政大学研究紀要、第 50 集、pp.9-16、(2009)
- 9) 日本経団連、新卒採用 (2010 年 3 月卒業者) に関するアンケート調査結果の概要
<http://www.keidanren.or.jp/japanese/policy/2010/030.html>, 2012/3
- 10) 横田直子、坂本裕子：短期大学における 5 年間の栄養教諭養成の現状と課題、第 33 回日本家政学会関西支部、滋賀県立大学、2011 年 10 月
- 11) 坂本裕子：食育体験活動・食と農を結びつける体験活動は学生にとって有用か、京都文教短期大学研究紀要、第 46 集、pp.152-157、(2007)
- 12) 大崎正幸：栄養士教育における農業体験導入の実践報告－菜園同好会「プランターズ」での活動に基づいて－、名古屋文理大学紀要、第 11 号、pp.129-136、(2011)

